



TITLE:

「太陽照在桑乾河上」をめぐって

AUTHOR(S):

島田, 久美子

---

CITATION:

島田, 久美子. 「太陽照在桑乾河上」をめぐって. 中國文學報 1956, 5: 99-121

ISSUE DATE:

1956-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/176637>

RIGHT:

## 「太陽照在桑乾河上」をめぐつて

島田久美子

京都大学

### 一

『太陽照在桑乾河上』は、中國共產黨の土地改革を主題とした作品である。

一九四六年に始まったこの土地改革は、中國革命の成否を決定する大事業であり、同時にまた、中國の主權の交替を明確にする歴史的な事柄でもあり、中國人民にとつては、ヒューマニズムの存在をたしかに手につかむ契機ともなつた。

作者丁玲は、この中國をゆるがした土地改革運動に實際に参加し、およそ三十年にわたる、作家として革命家としての彼女の生活の、一つの成果、また到達點として、この作品を書いた。『太陽照在桑乾河上』はその意味で、中國

「太陽照在桑乾河上」をめぐつて（島田）

革命の本質と、作家丁玲の方向が、大きく示された作品であろう。同時に、中國の新しい社會において、現在の創作文學がどのような質でありうるかということをも示した作品である。

いま、この小論では、そうした社會的背景や條件の中で、一つの要請として作られた文學ともいふべき『太陽照在桑乾河上』をとりあげ、革命後にあらわれた他の多くの文學作品に對しても我々外國人讀者のもつ不滿の原因を分析してみたいと考える。

それが、文學作品といわれるためには、文學・藝術としてそなえていべきもの、それはもし、分離した言い方が許されるならば、歴史をこえ、歴史を通じてつらぬきとおされて來ているもの、つまり經としての文學性が、がうなずかれなければならぬと思われる。むろん同時にそれが時代性をおびるために當然加えられる緯としての面も忘れることはできないこと、もとよりであり、こうした經と緯とは各々獨立背反するものでは決してなく、むしろそのからみ合ひの密度の高さが、讀者の共感や感動をいざなうものだと

いえるであらう。したがつて、新中國の革命の中で生まれた文學であり、毛澤東「文藝講話」の要請と新中國の誕生という時代性を緯として評價の高いこの作品が、スターリン文學賞（一九五二年度第二等賞）をうけていることや、多くの讀者に歡迎されたということと同時に、それ以後の中國に見るべき作品がほとんど生まれていないこと、既成の大家はもちろん、革命の中で育つた趙樹理などの新しいタイプの作家もふくめて、同じように書けない状態にあることなどがある程度、豫知させるものをはらんでいるのではないか、それは文學の經そのものへの捉え方の貧困によるのではないか、そういうしたことなどを、一、二考えてみたと思う。

『太陽照在桑乾河上』が、我々外國人の讀者にとつて、どのように受けとられるかという點については、今までに多くの人人の發言があり、その前進的な面のみに對して、肯定的な意見が大部分であつたと考えられるが、しかし「この小説については、はじめ私はさほど高い評價を與えていなかった。」（現在中國文學全集丁玲篇あとがき・岡崎俊

夫氏）

という意見もまたありうることは、無視しがたいことに思われる。またこの作品が中國革命の本質と、中國文學の性格を示しているという點からいえば、この一作にかぎらず、現代の中國文學全體に關する問題をもふくむであろう。この意味で筆者もまたこの作品を讀んで、中國における文學のあり方に一つの意見をもたねばならなかつた。そうした面から、丁玲のこの作品がはらんでいる、文學としての問題點を追求し、あわせて中國文學の、新しい方向に私の求めるものをも、一、二のべてみるつもりである。

## 二

本論に入る前に、この作品を簡単に説明しておきたい。

舞台は、解放區として、華北察哈爾省涿鹿縣にある、暖水屯という、主として果物を栽培している農村である。既に二度ばかり、地主と貧農との清算闘争が行われており、農民組織についても、幹部の數はととのい、一應は形をなしている新しい村である。しかし、そうした表面の姿は、

一台のゴム輪の車（膠皮大車）の出現からひきおこされる内情展開の描寫によつて、型通りの解放區でないことをあらわにしていく。このゴム輪の車の出現は、この作品を通じて終始一貫、悪玉として描かれている錢文貴（ボス地主）に、事態の何ごとかを教え、土地改革の開始をつげるのであつて、車は、隣村の富農・胡泰が、とりあげられることを怖れて、嫁の里にあづけたものであつた。あづけられた願湧も、やはり富農であり、同じように土地改革には不安な氣持を抱いている。地主たちは保身保財のための策動に躍起となり、富農は立場の不安さにおびえる一方、貧農は命ほどこにもほしかつた土地が自分たちのものになるといふ、夢のような期待をもたされて、畑へ行きもせず集まつてはヒソヒソと話し合う。こうした中に、土地改革遂行の任をおびた四名の工作員が、區から派遣されて來て、いよいよ暖水屯の村は新しい課題に直面することとなる。

やがて、工作員たちの指示によつて農會がひらかれるが、大きな期待をもつて集まつた農民たちは、殘念ながら工作員・文采（インテリ出身）の講演に、すっかりうんざりして

「太陽照在桑乾河上」をめぐつて（島田）

しまう。彼らの直接の要求とはほど遠いはなしてあつたからである。工作の困難の豫告は、農民の無自覺性と、ボスの根強い權威、それに加えて工作員、幹部たちの性急さによる工作の再三の挫折によつて、示されてくる。その第一の例として、無能な地主・李子俊が、妻子も果樹園も放つたまま逃亡し、鬭争なく勝利がやつて來るかにみえるが、幹部にはげまされて土地證書をとりにおしかけた小作人たちは、泣きふして證書をさし出す李子俊の女房に、あつてなく同情してしまふのである。土地改革の第一歩はまず失敗であつた。

工作員や幹部たちが、地主や富農などのうち誰に鬭争の對象をおくか、ということと意見の一致をみない間に、期待をうらざられた貧農の、抑えようのない不満が、いつ爆發するか分らぬという状態になつて、ようやく一つの手段が講ぜられることになる。十一戸の地主と富農の果樹園が封鎖され、農民の管理にまかされる。今年は例年になく豊作で、葫蘆冰（果物の名）も海棠も梨も、枝もたわわにみつつあり、それらがすべて貧農の利益として分配される

ことになつたので、村は非常な活氣をおびてくる。貧農總出のにぎわいで果實採收に當り、村は祭日のようなよろこびにたかなる。また一方、村長・江世榮（抗日戰爭中、惡質なことをしたボスの一人）に對しても、小作人たちが清算闘争に出かけ、この闘争は弱腰ながらも目的をはたすことができた。暖水屯の土地改革にはじめての勝利が、動搖と逡巡の中に、ともかく一つ達成されたわけである。ところが、この活況にかがやいたかに見えた村が、又ひつそりと沈黙を始めることになる。ことのおこりは、治安委員の張正典（錢文貴の娘むこ、動搖分子）と、活動停止の身分におかれている劉滿（錢文貴にその一家を破滅させられた農民）とが、大げんかをしたことによつてである。村中の、この不満をともしつた沈黙は、もつとも憎らしいボス・錢文貴を、幹部が放任していることへの警告であつた。こうした混亂と困惑の状態にある村に、縣から、若くて能力ある宣傳部長・章品が、桑乾河をわたつてやつて来る。彼の適切な判斷のもとに、正しい決定がなされ、ほとんど全村民の要求である錢文貴の逮捕が行われた。村の八大惡黨のなかでも最

大の惡黨が、大衆裁判にかけられる機會がやつて來た。村はつぼの如くわきかえつて、錢文貴との闘争を展開する。

闘争は終つた。ゴム輪の車は、共產黨の正しい政策によつてとりあげられなかつたのである。車は隣村の持主の手にかえされ、富農・顧湧もようやく獻地を決心する。勝利の果實は分配されなければならない。その分配をめぐつてもつとも意識のすすんでいるべき幹部が、個人的な利益を争つていざこざを起したりする騒動もあるが、やがて全村の承認を経るということで圓滿解決の運びとなる。時に内戦の戦局は急を上げ、八路軍不利のしらせに、村の農民はふたたび立ち上り、さんごう堀りに出發する。勝利の果實を、ふたたびボスや地主にうばいとられないために、闘いは方向を變えることになる。

以上があらすじとしての事件である。これを整理すると次のようになる。

#### 一、膠皮大車の出現・新事態の豫告

策動・不安・期待 一—十章

二、工作員到着・農會ひらく

失望・分裂・動搖 十一―三十一章

三、李子俊逃亡

土地改革失敗 三十二―三十六章

四、果樹園封鎖・江世榮との鬭争

初勝・一方では喧嘩對立 三十七―四十章

五、章品同志来る・決定 四十一―四十五章

六、錢文貴逮捕・清算鬭争

分配争い、新しい任務 四十六―五十八章

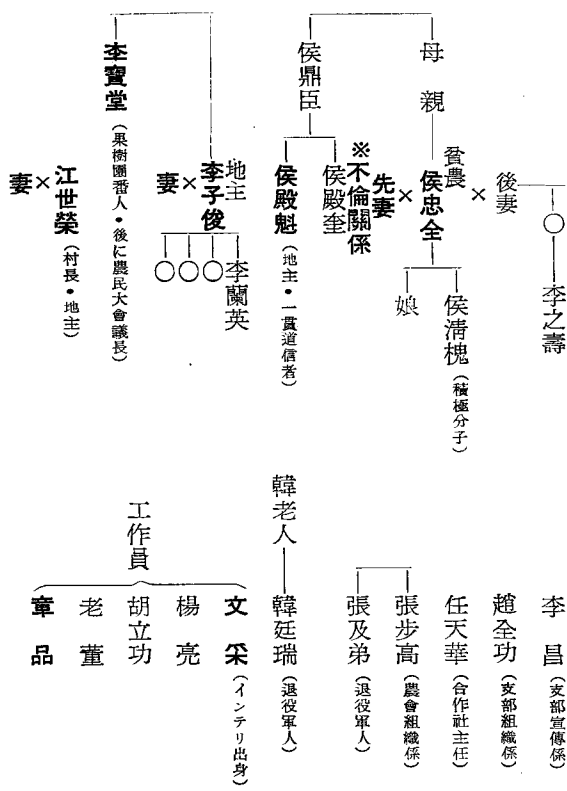
これだけの整理で、一と二との前奏曲的な下地に、土地改革運動のケースをどのように描こうとしたかが、ほぼつかめるであろう。これに配するものとして、富農の願湧一家、農會主任程仁の戀人黑妮、婦聯會主任の董桂花、黨員幹部の張裕民、文采同志、宿命論者の貧農侯忠全、區工會主任の董さん、副村長をしている趙得祿、貧農劉滿、章品同志らが、それぞれ一章をもつて來歴や性格を描かれ、暖水屯の土地改革の進行に、おのおのの立場から關係をもつことが知らされる。これらの人物は、いろんな立場の代表

「太陽照在桑乾河上」をめぐつて（島田）

（但し地主は含まれていない）であるが、終局的には土地改革の結果、革命肯定の立場にすべて還元されるべき人物としてえがかれている。その他、あらゆる權力の隠然たる保持者、錢文貴をはじめとして、地主・富農・中農（この作品では該當する人物がないようである）、貧農・幹部・工作員・教員・巫女などが登場し、個人の資格で筆にのぼされただけでも六十名以上に達する。しかも、その人間關係をたどつてみると、別表の如く、中國農村を絶對的に支配してきた富と權力の結合のしかたが、一つの典型的な背景として示されている。たてとよこの糸は、この原則による複雑さを示し、それだけにまた、この村の土地改革――それは、富と權力支配の根底的な變革であり、封建支配による人間關係の否定であるだけに――の困難さを、より多岐にするだろうことをも豫測させる。

全五十八章、期間はおよそ二十日ばかり、このあらずじと、この人物群とをもつて、丁玲は何を描こうとし、何を描きえたのであろうか。また何が問題として殘されるのであろうか。





### 三

ものがたりは、以上の大筋にそつて、教員・幹部・工作員・地主・富農・貧農たちという老若男女が、それぞれの生活の中でどのように土地改革をとらえ、その利害をめぐつてどのように行動するかを描きつつ展開する。主題は土

「太陽照在桑乾河上」をめぐつて（島田）

地改革であり、その完成を描き出すことが、この作品にとつて前提的な要請である以上、作者はその任務に忠實であつた。

したがつて、この作品では中國革命にとつて重要で正しい命題である土地改革工作を、絶對的な成功をかちとるケ



ースとして描かなければならず、また事實多くの迂餘曲折を経たにせよ、土地改革は完遂されえた事柄でもあつたために、改革の失敗のまま作品を終るならば噓になるという事情も一つにはあつて、ごく常識的に、團圓をむかえるであらうことが、中國革命を知るものにとつては、讀まぬ先に豫知されている。しかも、中國革命の一つの成果を内外に示す、いわば教育的意味も賦與されているため、階級理論による人物分析の立場を度外視すれば、にくたらしい惡玉が、正義の善玉にかならずうち亡ぼされるという、講談的なスケールにおける權力者の交替——新主人公は讀者の身近な英雄たちになるというたのしさ——としての、おもしろさの見通しが、簡單につけられるものになつてゐる。

このことは多かれすくなかれ、革命文學のどの作品にもいえることであつて、文學を讀むたのしさにとつて一つの障害になつてゐることは否めないと思われる。

土地革命の遂行、完成までのいきさつは、以上のような豫見のもとに讀者の前に展開されるという條件、また一つには中國革命の事實が、制約を加えているという條件の中

で、くりひろげられねばなくなつてゐる。そうした條件の中で、作家としての丁玲は何をとらえようとしたのであらう。それについて、興味あることを次の文はのべてゐる。

「彼女が比較的注意したのは、やはり若干の人物であつた。ひまさえあれば、彼らのところへ行つて話をし、それらの人物の性格、様子や心理を理解したのであつた。しかし、もつと注意しなければならないことは、彼等のこの偉大な運動の中の思想變化であり、一つ一つの政策が執行されるときに反映する心理變化であつた。彼女は自分のやり方が足りないと感じた……」（中華全國文學藝術工作者代表大會紀念文集丁玲訪問記）

偉大な運動の中の、大衆の思想變化と心理變化をとらえようとしたことを、この訪問記はつたえている。それがどこまで成功したかを、具體的な作品の中で検討してみよう。

丁玲はこの作品をかくに當つて、實際の土地改革工作に参加した。それは、寫在前邊（まえがき）にも見えるし、新

中國の創作條件にとつては不可缺の條件（毛澤東の文藝講話は明確にこのことを要請している）でもあるから、決して特別のことではなく、むしろ當然の参加であつた。このことが作品の上に充分大きな力をあらわしているのは否めない。すくなくとも作者が必要な登場人物を描きわけののに、他の作品では我々のよく接するような人物設定の一律類型化を、おかしでないことにも見られるであらう。特に肯定されなければならない人物については、それぞれの立場や主張の描寫に無理がないといえるであらう。例えば、その一人として、侯忠全老頭をあげてみることにする。

彼は親戚に當る地主の侯殿魁（この春、既に清算されている、一貫道信者）に、分配された土地さえかえしてしまつたほどの頑迷な一貫道の信者で、變天思想（宿命思想というべきもの）をもつ意識のおくれた老人である。自分の妻と子供だけには、新しい風潮にかかわらせまいとして、積極分子である息子をとじこめたり、妻を叱つたりするおやじでもある。

「えい、女のくせに、いい年してまだあれこれ聞きたが

「太陽照在桑乾河上」をめぐつて（島田）

る。お前にや關係のねえこんだ。そんだのに、まだ會さ行きてえとぬかす。わからがわからまいが、得がいこうがいこまいが、かまつたこつちやねえだ。やつぱし分さ守つて、餘計なことにや、かまわねえこつたぞ。」（一九五三年一月北京版人民文學出版社第四版。以下同。第二十章徘徊）

また、おいの李之祥（婦聯會主任の夫）に

「ハッハ、だめだて。おらのこの腦みそは、當世向きじやねえだ。今は新しい御時世だ。新しい御時世にや新しいやりかたがあるだ。ゆんべあの同志はうめえこといつたぞ／何もかもみんな貧乏人のためにやつとる。だけんど——ああ、おらのこの一生は早やおしめえだあな。お前の叔母さんやいとこたちやあ、みんなこの年寄りに反對してるだ。おらがいなかつたら、奴らみんなとうの昔に立ち上つて金を儲けてるこつたろうよ。ハッハ……お前はやつぱしかみさんのいうこときいてたがええぞ。かみさんはやり手だかんな。今どきや牝鶏でも時さつげるだて。男女平等だてな。ハッハ……」（同章）

また、彼は心の中では自分の哲學を主張してゆづらない。

「八路軍のいう理窟はなるほどいい。しかし、彼がかつて読み、かつて聞いたどんな本からいつても、何千年來、貧乏人が主人公になつたためしがないことを知つていた。」

(第二十一章侯忠全老頭)

貧乏な侯忠全のこの言動の中に、讀者は工作の容易でない前途を知ることができよう。新しい時代にあつても、舊い自己の信條を變えようとしなない老人、しかも、その舊いモラルが效力をうしなつていきつあると、既に知つてゐる哀しさと、それでもやまぬ勤さがあり、民衆の生活に生まれた哲學の根づよさをあらわした人物である。それには、それだけの主張の根據も歴史もありながら、時は既に彼のこうした性格をおき去りにしていこうとしている。變革にしたがうか、したがわないか、道は二つしかないのであるが、この人物の結末は、必要でしかも實在した典型の變革を約束する過程としておかれている如く、やはり筋書通りうれしく翻身してしまふ。うれしく翻身してしまふ、とかかなければならない所以は、彼が二つの道のうち、新しい道を心からつかむにいたるまでの、深い動搖と苦惱、

うたがいやあせりが捉えられていないために、折角の彼の個性が我々の印象からさつと消えてしまふ結果になつてゐるからである。作者の立場が、侯忠全その人を描ききる前に、到達すべき結末を急いだためかもしれない。これは侯忠全一人にかぎらず、人物全體についても、程度の差はあるが、いえることだと思ふ。

すなわち、課題にこたえるために設定された人物の配置と、その描寫において、徹底的な惡玉であり地主でなければならぬ人物、改革に積極的な役割りをはたす人物、おくれた思想をもつ農民、萬能的存在の黨員、迷信をばらまく人物、それらがどのような結末をもつにいたるかが、ほぼすべに見通されているのを、そのまま裏がきしてあとに何も残さないからである。この事實は、中國の新文學に、類型的な作品を生む地盤が非常に大きいという、一つの興味ある事實を示すものであり、この作品も例外でないことを見せる點であらう。

惡玉・ボスとしての錢文貴をみて、彼が革命と反革命の二道をかけた惡黨で、息子の錢義を八路軍に出している

半面、教員の任國忠を使つてデマをとばしたり、姪の黒妮を使つてその戀人の農會主任程仁をろうらくし土地改革の失敗をはからうとするなど、惡質な策動がたくみに展開されながら、讀者には彼への憎しみがわきあがらない。彼が全村の人たちから袋叩きにされるほど憎まれていながら殺されなかつたことも、惡玉だから惡玉であり、黨の政策がそうした人間をも殺さないように指令したから殺さなかつた、というところえ方と、感ぜられないでない。

では、丁玲がもつとも描きたかつたと思われる貧農大衆の描寫はどうであらうか。彼らの變貌を大まかに捉えてみることにしよう。

「彼らはその有名な惡黨どもの名を指折りかぞえていた。そして、どこそこのボスが懲罰されたとか、またそれらの惡黨の財産が分配されたときいたりすると、彼らは決して自分たちのよろこびをかくそうとしなかつた。………」

#### (第八章盼望)

「清算」という事態をめぐつて、人びとの神経は極度に

「太陽照在桑乾河上」をめぐつて(島田)

敏感になる。デマはかぎりなくとばされ、國民黨軍の優勢が八路軍をおつばらうだろうというヒソヒソ話がかわされる。

「こんなふうな噂は、いつたい誰がふりまいているのだらう、まるでまた百姓衆自身のようだつた。彼らは決して共產黨がまけるのを望んでいるのではない、八路軍が長もちしないのではないかということが心配だつたのだ。そのくせ彼らはまたこつそりとこんな噂をふりまいているのだつた。」(同章)

しかし農民は自然の子である。

「それにまたちようど三度目の除草期にあたつていて、雨がふり、草の延びが何とも早いものだから、みんなもやけに忙しかつた。………彼らは又、あらゆる精力を自分たちのいつもの仕事に集中した。楽しみもうれしいも、すべて平靜に變つてしまつた。」(同章)

『中央軍』だつて中國人だ。おらたちは働らいて飯食つてゐるだ、別に役人にならうとか權力をにぎらうと思うじやねえ。おらたちはやつぱし百姓で野良のもんだからな。今

はこは天下太平、今年は雨もうまい具合に降つたし、畑のものや果樹もみんな悪かねえ。やつぱしすぐ来る稔りの秋を待つとしよう。」（同章）

勤らく人びとの樂天性を浮びあがらせた描寫である。ところが、村人たちは六時間もの長廣舌をふるわれた農會の歸路、こんな惡態もつく。

「體がまだ革命してねえのに、坐つてる尻のほうが先に痛くなつて來ただ。」もうひとりが振り返つて、そこに張裕民たちがいるのを見ると、すぐ走つて行つてその男をつついた。その男はいうのをやめて、一寸ウフと笑つた。彼らは足を早めて遠のいて行つた。」（第十七章六個鐘頭的會）  
新しい鬭争に逡巡を感じた李之祥はいう。

「どつちにしても出しやばらねえほうがええだ。おらたち、どんなことでも抜け道をのこしとくこんだ。ちと貧乏になつたところで、どうせ前世から定つてこんだ。萬が一、八路が中央軍にやられて、くらしが又むかしみたいに戻つたら、ひどい目にあうのはやつぱしおらたちだ。村の惡黨がどうしてそうすぐとやつつけられるもんけえ。」（第

十八章會後）

こうした期待、不安、疑惑、不信、小心はしかし、次の典型的な言葉を生むのに、巨大な變革の深部を昇華せしむることなく終つてゐる。例えば、顧長生（八路軍兵士の母（うるさ型のばあさん）はいう、

「うん、こんで、青空も見られるちゆうもんだ。村でこの旗竿を倒してしまわねえだら、共產黨がどんなに利口だつて、お天とうさまは照らしやしねえだ……。」（第四十七章決戰之前）

李之祥が侯忠全にかたる言葉は、舊世代人の感懷でもあらうか。侯忠全の感懷も複雑である。

「とつとつあん、もうお前のあの皇曆ふろいこよみは使えなくなつたらしいだ。いまはほんとに世の中が變つただでな。」（同章）  
「惡人にや、結局は悪い報いがあるもんだ。因果應報は逃れつこねえ。」（同章）

錢文貴との鬭争大會、議長に推された李寶堂じいさん（地主李子俊の身内だが貧しい）はいう、

「こんな日があらうとは思わなかつた。おらが

議長になるなんてよ……。」（第四十九章決戦之二）

かつての地主錢文貴は、今や農民の思いのままである。

闘争の勝利は豫想どおりに貧農たちのものとなる。しかしながら、與えられた解決の本質的な力づよさにもかかわらず、讀者に大きい感動はわかないようである。すくなくとも筆者にとつては、かのベルデンが、

「あちこちの村で、わたくしは幾度も、これらの農民がかれらのつらさを熱心な聴衆に告白しているのをきいた。

一人、貧乏な百姓が、不意に台上によじ上つて、地主が百パーセントという利率で貸した金を返済させるために、自分から作物をとりあげたために、自分の父親はどんな具合に餓死したかを語る。ちよいとあたしを見て下さい。女なのに男みたいに働らかなきやならないんです。だけど、あたしはおなかがすいているから力が出ないのです、よく働けないのです、それであたしはたたかれるのです!!そして彼女はなき出す。苦悶とともに安堵の涙であるといつてよいかとわたしは思う。なぜかならば、とうとう彼女は、彼女自身の民衆の中に自分の悲しみを叫び出すことができ

「太陽照在桑乾河上」をめぐつて（島田）

る司祭を見出したのだつたからだ。」しかし、限度というもののはちやんと守られていたのである。中國人はともと亂暴な民衆ではない。……果樹園の果樹を伐り倒してしまふこともなかつた。民衆は自分たち自身のためにこういうものを保存しておきたがつたのだ。殺人沙汰にまで行くことは行つたが、それはその農民が復讐を望んだからであつた。そして復讐は私的な仇討ではなく、集團的な復讐であり、村全體の深いところから湧上つた大きな熱情的な要求であつたのである。裁判所というものが一つもなかつた以上、その仕事を農民たちはかれら自身の手で片づけてはならなかつたのだ……。」（ジャック・ベルデン著

『中國は世界を動かす』安藤次郎・陸井三郎・前芝誠一共譯）

と、つづつた感動の質にうなづくことができるのに、丁玲のこの作品に、ある意味のよそよそしさを感じぬわけにはいかなかつた。もし丁玲がベルデンと同じような立場でこれだけのものを描いたとしたら、はるかに大きな感動を與えうる作品になつていたかもしれないと思われるのである。それは丁玲という作家の、作家としての性格からくる

面も大きいと考えられるし、自分の體驗の世界の中から、自分の存在を常に意識的におこむ作品になれた彼女が、能うかぎり作品の世界の外に立ちえた最初の大作であるだけに、自分の仕事の世界を擴大した時の勝手のちがう状態を、そのままの浅さとしてあらわしてしまつたともいえるであらう。

先の侯忠全のみならず、富農の顧湧も

「若えもんは世間知らずだからな」（第一章膠皮大車）

という、たつた一言のつぶやきを與えられることによつて、どういう人物かということがすぐうなずけるほど我々の中に生きていながら、彼が歎地を思い立つまでの、土地に對する深い執着が何ほどにも描かれていない。物語中のささやかな戀愛をとりあげても、かつては錢文貴の下男をしていた程仁と、錢文貴の姪で文字勉強班の先生黒妮とは、愛し合っている戀人でありながら、錢文貴の存在するため、お互いを見ることも愛することも許さぬ立場におかれているといふが、しかしそうした状態におかれている戀人たちの愛情や苦しみを描ききれていないために、

土地改革という社會的要請の前における人間關係、殊に個人の愛情が、充分な同情や共感をよびおこすまで成熟せず終つてゐる。人間の幸不幸は、下部構造の改革によつて決せられるとする立場から、最後にはこの戀人たちも明るく結ばれるというふうに暗示して解決する丁玲の筆は、かつての『莎菲女士的日記』の著者の、人間に對する愛情が、いかなる變化を経たかを考えさせるモメントをもつてゐるようにも思われるのであるが、人間の愛情に對する信頼感と樂天性が、粗い單純さにおきかえられる認識のしかたや、浅い描寫態度を、感じさせるのは残念である。

更にいえば、工作員文采の公式的な官僚性がひきおこす種々の失敗についてみても、諷刺以前のこつけいと悲慘をあわせたような不愉快さがあるし、神格に近い章品の描き方もきわめて安易であつて、人間としての共感にとほしく、他の農民たちの描寫としてはじめの方に示される寫實性と、完全に分裂している。必要な人物を設定しなければならぬという枠にはめこんだところから、重大な缺陷を生んでいることは否定できない。丁玲の作品經歷の中で、大

膽なまでに人間意識への彫りをみせる『莎菲女士的日記』などからみると、あつけないほどの筆の軽さでもある。變革期の興奮の中にある群像を描くことが、それほど單純にあつかわれてよいと、筆者にはどうしても思えない。

『太陽照在桑乾河上』の文章はかなりむづかしい。そのむづかしさを論外にすれば、會話にもられた内容は、實利との結びつきに對し率直に神經をはたらかす農民をとらえることには、成功しているといえるであろう。そうした點からいつて、いろいろな缺陷をふくみながらも、農民を描くことにおいては、やはり秀れた面をもつ作品であることを否定し得ない。土地を愛し、土地に生きる農民と共に生活した人でなければ、しかも自己を高みにおいてでなく農民の生活を體驗した人でなければ、とらえることのできないう面を描きえたという、誇らかな成果を示しているといつてよいであろう。その上、農民に對する信頼、生活に對する確信は、まだまだ解放されていない農村の實情——例えば侯忠全の、妻に對する言葉もそれであり、婦女聯合會の識字班に集まつてくる女たちは比較的ゆとりのある家の若

「太陽照在桑乾河上」をめぐつて（島田）

手だけという悩みもそうである——を、そのまま描いてたじろがないだけのものをもつているといえる。その基本的な信頼は、全篇を通じてもつとも筆の長い章、第三十七章、菓樹園鬧騰起來了（菓樹園に鬨争起る）において、農民集團の健康さ明るさ善良さが、丁玲自身の素朴な感動と相まつて、生き生きとあらわれている。ここには、革命のすばらしさを、作中人物と共に誇らしくたたえている作家丁玲の眼が、のぞいている。そうした文章の中に、時として、全體の描寫と不釣合に美しい風景描寫があることも注意すべき點であろう。農民の自然觀察とは異質な、あくまでも都市のインテリの眼によつて感動をもちこまれた息吹をもつ文章だからではあるまいか。

それにしても、

「中國農民層が、戦争と革命の領域に注ぎこんだまばゆいばかりの希望と、人を殺しかねましい深い憎惡とは、殆んどその社會を吹飛ばしてしまふばかりに、原子爆彈のような威力で爆發して中國社會の内部に情緒的なエネルギーを放出させた。」（前出ベルデン著）



という、一外人でさえ體感しえた、この情緒的なエネルギーを経験したはずの丁玲が、どうしてその感動を作品の中に、高く結晶させえなかつたのであらう。さまざまの動搖を経ながら、立ち上りそうでなかなか立ち上ろうとしない農民の動きを克明に描いて、過大な欲望と自主性の缺如が、農民の生活原理の肌理をそれることなく、力と意志によつてきたえられていく過程の描寫としては、作品の前半に無理がなかつたにも拘わらず、感銘を残すには力が弱かつたのである。登場人物が必ずしも一律でなく、また人物造型にある程度の成果をもちながらも、後半に入ると登場人物は全體的にみて印象を稀薄にする。作者の意圖が、作品に一貫していたとしても、後半になると、登場人物に加えている價值評價をそのまま、あらわにしているだけであるからかもしれない。人物群が土地改革の成功の前に消えていく、それはこの場合、讀後感到感動をもちこむ力づよさには到らず、作者の弱い面を示しているようである。

丁玲は、錢文貴との鬭争が一段落をつげた時に、こういう言葉を終りにかいている。

「これは一つの終局である、しかしまた發端でもあるのだ。」（第五十章決戰之三）

土地改革、中國の革命はこれからだというのが作者の言葉の意圖であるが、中國新文學もまたこれからという期待をも、この言葉にはこめなければならぬと筆者は思ふのである。

#### 四

以上のような考察から、新中國における創作の理論と實際との關係をすこし検討してみようと思う。菊池三郎氏の『現代中國文學史』によれば、『太陽照在桑乾河上』は、中國における第二の文學革命の位置を占めるものだといふ。菊池氏の分析では、第一の文學革命は革命の擔い手の變化をつげるモメントであり、第二の文學革命は文學そのものの擔い手が變つたことをつげる一つのモメントであるが、第二の道標としてあるのがこの作品だとされる。文學そのものの擔い手とは、作家のみを指すのではなく、讀者全體をふくめているということとは、既に知られる如く、毛澤

東の文藝講話に明確に規定されている事柄である。しかも、この第二の文學革命で、文學の擔い手の變化という重要な底邊につれて、文學の質が同時に變つたということも、共にあつさり認められた事實のように見うけられる。けれども、我々はこの事實にこそ、深く注意したいのである。

丁玲がこの作品をかく以前、既に延安において新中國の藝術創造のために、文藝にとつての歴史的な根本理論が發表されている。それはいうまでもなく、『在延安文藝座談會上的講話』一九五二年五月であり、今日我々が手にしうるかぎりの新中國の文學作品は、すべてこの講話の基本線にそつてかかれたものだといえるであらう。そして、中國革命の大事業にとつて、文學がどのようなあり方で要求されたかということを見る時、我々はそれが「鬭いの武器」としての文學という規定を與えられていることを知る。

「中國人民解放のための我々の鬭いには、いろいろな戦線があるが、中でも特にとりあげるべきものに文武の二つの戦線がある。それはつまり、文化戦線と軍事戦線である。」（在延安文藝座談會上の講話引言）

「太陽照在桑乾河上」をめぐつて（島田）

丁玲がこうした文化戦線、「鬭いの武器」として、作品をかけたことはいうまでもない。しかし、大衆路線を貫徹するという意識下に、土地改革の偉大なる完遂と、その過程における、偉大なる人民大衆の變化こそ描かねばならぬとした第一義的な前提は、作者の前に大きく立ちはだかつたものとして、我々の目にうつってくる。残念ながら作品の破綻は、大敘事詩の格調の高さにとつて、前提が充分な桎梏であつたことを示しているようである。

「人民の生活の中には、もともと文學藝術の素材である鑛脈が存在している。それは自然のままの形をしたものであり、荒けずりなものである。しかしながら、もつとも生き生きとした、そしてもつともゆたかな、もつとも基本的なものでもあるのだ。」（前出文藝講話）

という毛澤東の言葉は、ゆたかな源泉の所在をさし示しても、そこから何をどうくみ出してくるかにはふれていない。それは作家たちの具體的な仕事である。そして丁玲は、これだけの素材範圍と、これだけの體驗をもちながら、作家のエネルギーと精神力を、大きく躍動させることができ

なかつた。彼女は材料の大きさと、方向の要請の前につかれてしまつたようである。

更にいうならば、文學に先行するに理論がある、という事實が、實際の作品の中に作家の精神力と讀者の精神力とを阻害しているといえはしないか。このことは、文藝戦線としてあつた革命戦争最中での文學創造に對して放つべき言葉でないかもしれない。だが、文學とは、背景や社會的條件の一切、また作家の來歴まで、豫備知識としてもたなければわからない、というものではないであらう。むしろ文學それ自體が、嚴然として、自律排他的に完全に獨立してありうる、とは、これまでの歴史も語っていない。しかし、それは外的な條件、あるいは力關係の如何によつて、時に變形され、誇張され、歪曲され、また時には忘却され、干渉されることなどに、關係がないとはいえない、ということなどではあるまいか。だからこそ我々の不満は、いま新しい力を經驗している國々に、その新しい力の誕生におけるのびのびした人間性が、もつと餘すところなく自由な魂をもつてあらわれることを求めているのだといえはしな

いだらうか。我々がいま、新中國の文學においてその發展を阻害していると思うことは、やはり作家や讀者の、自由な精神の飛翔に桎となつてゐる理論の先行性だと考えられる。もちろん困難な問題ではあらう。そして次の記述はまたその不満を、より明確に根據のあるものとする。

一、作品・工作に先行して、文學理論・運動理論が生まれ、この理論によつて作品も運動も組み立てられ育成された。その理論の實踐の檢證として、文學作品・文學運動があらわれたのである。

二、中國革命のばあいには、北方文學・文學運動そのものが、そのまま全革命運動の構成部分として（文化の軍隊）、統一された意識的計畫的な運動をなしていた。そのものが革命機關の組成部分をなしていたのである。菊池三郎著『現代中國文學史』

菊池三郎氏は、この分析と事實に對して、大へん同意的もしくは擁護的な立場で同著をつらぬいておられるようであるけれども、むしろここにこそ、文學に對する一つの警鐘を聽取することができるように思うのである。かかげら

れた目標の正しさのゆえに、反對することのできない新中国の政治理論から派生するものとして、それに生のまましたがつう、いわば盲點のような作用を示してもいいといえう。

「しかも、よし文學は政治に従屬するということを公理とするにせよ、文學が文學であるという、きわめて單純な理由によつて、この公理の擁護された根源には、作家の自主的な、千萬人といえども我行かんとする文學精神が嚴乎として存在したのである。このことを理解せずに中國近代文學、魯迅の傳統、ときにはその旗が氷雪にたれ、ときには春風にはためいた幾轉變を語ることにはできない。このことを忘れたものだけが、南北文學の統一を、中國文學の卑俗な「政治」主義への屈服の如くに説き、或はまた、中國文學者が擧つて卑俗な「政治」主義者になつてしまつたかの如くに説きうるのである。ともに中國の新しい政治と新しい文學とへの無理解の表白であることに變りはない。」

(前出菊池三郎著)

この擁護が、一面では眞實で大切な言葉をもちながらも、

「太陽照在桑乾河上」をめづつて(島田)

やはり中國の文學の、現段階に對するただ全面的な肯定としてあるかぎり、新しい展開のための力づけに親切な立場ではなくなつていゝといわねばならないであらう。時代の埒外に高踏的に作家が在る、というのではなく、時代と共に生きながら、なお時代の枠に所有されてしまわない魂が、我々に語りかけるものこそ必要なのではなからうか。我々をたのしませ、感動させ、生き前進させることのできる文學、それはおそらく、創造のあらゆる段階において、人間こそが最高の價値の基準となる文學であらう。それが個人的に深く、しかも普遍的なものとして、ゆたかな自由の精神に花ひらくことを我々はのぞむのである。プロレタリアート、人民大衆のヘゲモニーと、もれることのない人間性の獲得とにとつて、このことは決して矛盾した課題ではないであらう。否、むしろそうしたヘゲモニーのもとこそ、すばらしい文學は生まれるのだという期待をもてばこそ、そういいたいのである。

## 五

丁玲がこの作品を完成するにいたるまでには、それこそ、第二の文學革命とされるだけの血みどろの足あとが刻まれたことはいうまでもない。

「あのころどうして小説をかくようになったのか、考えてみますのに、それは寂寞からだつたと思います。社會に對する不満や、自分の生活の出口のなさなど、澤山のことがあつて、どうしても話したいのに、きいてもらう人が見當らない……。」(『丁玲代表作選』編序の文)

一九二七年、創作を始めた頃の自分を回想して語つた丁玲が、延安に一步一步とたどりつくまでに、またたどりついてから、どれほどの厚みのものを捨てなければならなかつたかは、多くの延安以後の作品にみえるし、彼女が實際に革命を生きて來たということを、次の言葉は感動深くつたえている。

「われわれは労働者や農民ともつとも緊密な接觸をたまたざるをえませんでした。でないと、われわれは、藝術はもちろん、われわれの生命さえ維持できなかつたのです。」(バーテュット著『纏足を解いた中國』山田坂仁・小川修共譯)

このことは、丁玲として歩みえた生活の内容をそのままつたえたものであつただろう。壁につき當り、生活に戻り、そして生活をいかに擴大するかという彼女自身の課題に對する回答でもあつた。毛澤東が文藝講話の引言で、自分が人民大衆、工農階級、八路軍兵士たちと共に生活した中で、何が本當に美しいものかということを知つたという言葉は、彼自身の感動が、率直でしかも眞實なひびきをもちつつ、我々につたわるものをもつてゐる。しかし、丁玲の生活の中で、ギリギリのところに出た右の言葉と、人民の中にすべてが、ということを上命令とした作品との間には、感動の質がことなつてゐるように思われる。それが例えば、作品の終りの、事態收拾の粗雑さにあらわれ、丁玲の疲労を感じさせる筆になつてゐるのである。寫在前邊(まえがき)では、ヨーロッパ旅行のために急いだと、事情を辯明してゐるけれども、初版と、筆者がテキストとした第四版との間に、さして大きな變化はみられない。

『太陽照在桑乾河上』が丁玲の歴史において、一つのピークとして結晶したといわれる(菊池三郎氏)だけに、中國

のあの歴史をかえる大事業、多くの血と涙を流し、時には多大の犠牲もはらい、罪惡も行われたであろうような、そうした世紀の地の底からのわき立ちが、感動にもりあげられず、平靜に描かれおわた土地改革であるのを、我々は大へん残念に思う。丁玲のヒューマニズムが、文筆生活の歴史、波瀾の生活を通してあらわれきたえられ、今日の域に到達したとはいえても、それが作品の上で型通りの正しさにおける安直さに終つてはなるまい。そして又、丁玲としてもつているあたたかさと、人生へのきびしい態度、藝術への眞摯で謙虚な態度を、しばられたものとしてはならないのである。そうでなければ、いつまでも、社會主義國の文學は、世界の人びとにかたりかけるに當つて、ある危惧を残すおそれなしとしない。

筆者は、中國の作家たちが、千萬人といえども我行かんという意氣と、秀れた文學的資質を有していることを疑いはしない。同時にまた、社會體制が變り、指導理論が正確にくるいなく打ち立てられたとしても、そこに生活している人びとはやはり、我々の喜怒哀樂の情と餘りちがわな

「太陽照在桑乾河上」をめぐつて（島田）

ものを所有する人びとだろうと考える。そして、コミニズムのもつ最大のヒューマニズムが、すべての人びとの物質的生活の保證と、その無限の向上にあることを、否定することのできない立派な面だと考えるが、その實現のために、數多くの約束や規約を伴つてつくられた多くの理論が、ヒューマニズムにとつて必ずしも全面的に正しい方向を與えたといえないのではないかとおそれる。特に、藝術にとつては、前提と理論がいかに立派であつても、それが約束として藝術を規制するとき、すばらしい自由精神の所産はありえないと思う。

ゴリキーは、自己の文學生活の中から、文學論をあらわした。それは彼のみが生きた世界の中で結晶された眞實と高さにみちており、彼の生活の直感的で科學的な確信にあふれている。しかし彼が打ちたてた理論だけが、不動の金字塔に輝やきを放ちうるものではなく、まして彼はその理論の檢證のために作品を生んだのではなかつた。それ以後のソヴェト文學が卓拔な光彩を放つていないことは、外國人のみならず、ソヴェトの作家、評論家が常に指摘

している通りである。理論は人間の生活の中から生まれたものではあつても、それですべてが動いたり、人間が筋がき通りに生活するといふほど、簡單なものでないことが、正しく認識されるべきでもあらう。人間は自由に考え、自由に生活する、そこにはしかし、長い歴史と長い生活での、人類の叡知にみがかれたモラルが、人間を自ずから支配しうるものだという、ヒューマニズムへの大いなる信頼が必要でもある。そしてこのことは、コミニズムがヒューマニズムをかちとりつつある中國でこそ、あらねばならぬ將來でもあらう。

「品物はできるだけ立派につくれ、そうすればその品物はより堅牢であり、餘計な努力の消費から君を解放するであらう。だが君のつくつた靴や椅子や、あるいは書物から『自分のための偶像をつくり上げてはならぬ』——これはすばらしい『戒律』である。」（ゴリキー著『文學論』除村吉太郎・日野守人・和知久夫編）

このことは、中國の革命の事業が大きな仕事であり、その成果が勞苦の大きさ以上に立派であつたからという理由

で、先行する文學理論をいささか偶像にしている中國の文學創作に對しても、大きな「戒律」であり、一九四二年當時の文藝講話のはたしている役割と、その正當な止揚への検討が、具體的な文學作品の中で我々の前に提起されることこそ、我々にとつてもつとものぞましい事柄でもある。

思想と感情、社會的義務と個人的自由が、眞に全創造をつらぬく力として統一されること、作家その人の、もつとも基本的な創作意欲のはたらく面へのとりくみ、そうした中から新しい人間像のほり下げと創造が必要なのである。無葛藤の中に、理論による、理論の檢證のための文學が、「人民文學」だとするのは、人間への侮辱を含むかもしれない。善意から出ているにせよ、それは性急なポピュリズムによる粗忽さであらう。革命の事實が解決しえないものはないという安易さでなく、人間の深い追求、生活原理の廣い深い認識の中で昇華させた文學を、そして作家の責任において高い藝術的眞實、主觀的眞實をもつた文學をつくり出すことこそ、中國の新文學に與えられた課題でもある。

新しい風土の上に、第三の文學革命を期待しよう、そしてそれは最近の中國における文學活動の新しい態度からみても遠いことではなさそうである。

## 附

版本によつて、原文にちがひのあることは既に、岡崎俊夫氏によつても明らかにされている（現代中國文學全集丁玲篇あとがき）通りであるが、その最大のちがひは、初版にはなかつた各章ごとの題があらたにつけられたことである。内容について筆者の氣のついた範圍では、さして大きい増減はなく、その二・三の例をあげると次のとおりである。

### 第十二章 舊版六十頁六行目

他怪自己沒有學問有些攀不上去的樣子。

### 新版七十三頁一行目

他怪自己沒法去攀上他們。

### 第二十一章 舊版百十五頁十行目

殿奎還憤氣不過，

「太陽照在桑乾河上」をめぐつて（島田）

### 新版百三十九頁四行目

殿奎看見他心愛的女人死了憤氣不過，

### 第二十三章 舊版百二十六頁一行目

這是治安委員張正典。

### 新版百五十一頁九行目

這是治安委員張正典，不知爲什麼他叫他主任。

### 舊版百二十八頁九行目

「主任，是不是？」

### 新版百五十四頁九行目

「同志，是不是？」

### 第五十二章 舊版三百四十二頁十四行目

那就要影響秋收，這是一個大的問題。

### 新版四百十五頁九行目

那就要影響秋收，何況還有平綏路上的戰爭情況，這是一個大的問題。

舊版 新編書店 一九五〇年五月 第一版

新版 人民文學出版社 一九五三年一月 第四版